

創刊は36年前

緑中学校の広報紙の始まりは、1983(昭和58)年。記念すべき第1号の表紙には、佐々木PTA会長のあいさつで「予算の厳しい中、念願の創刊」と喜びが綴られています。B5全4ページ白黒。

PTA専門委員会は文化、施設、生活、保健体育に分類され、広報は文化部の中の編集委員会という組織でつくられていたようです。翌年度からは、広報部が独立した組織になりました。

表紙のロードレースの写真には、指定の体操着にブルマとよばれる密着型パンツ姿で走っている女子の姿があります。時代を感じますね。

題字「みどり」に



第7号1985. 6. 5発行

より親しみやすく、読みやすい紙面を目指して、第7号より題字が「緑中だより」から「みどり」に改名されました。

写真には体育館で演劇「走れメロス」を鑑賞している様子が写っています。

千樹水園

かつて校舎の近くには千樹水園とよばれた底なし沼のある緑地がありました。

PTAが大規模な改修工事を施し、生徒により35本の苗木を植樹。池のヘドロ上げや岸辺の杭打ち、草刈などをPTAで行っていたと記されています。

公園内には木製の橋や藤棚もあったようです。

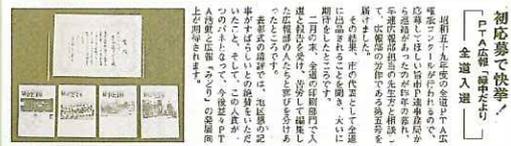
長い間生徒たちの心を癒してくれた千樹水園は校舎の改築に伴うグラウンドの整備により埋め立てられ、現在はありません。



第5号1984. 11. 30発行

道P広報紙コンクール大賞受賞

第2回全道PTA広報紙コンクールに初応募し、第5号が道P連会長賞を受賞。皆で喜びを分かち合ったと第7号に書かれています。委員たちの良い広報紙を目指す熱い思いは、今も昔も変わらないのですね。



第7号1985. 6. 5発行



第21号1988. 12. 10発行

この頃は、日頃仕事で忙しいお父さんにも積極的に参加を促す狙いで、年に一度日曜参観が行われていたようです。第21号には、6名のお父さんが感想文を寄せています。この広報紙をご覧のお父さんも、次の参観日、ぜひ行ってみませんか？
写真には、生徒の机に皆お揃いのリュックが掛けられています。リュックも指定だったのですね。

日曜参観と教育講演会

日曜参観後にはPTA研修として教育講演会も合わせて開催していたようです。第18号では、会場の美術室が185名の保護者で満員とあります。教育への関心の高さがうかがえます。



1987. 11. 8 心うたれた講演会

十一月八日
PTA教育講演会開催
昭和六十一年十一月八日
◎場所 緑中学校 美術室
◎講師 道庁教育委員会 田中 孝
◎演題 青少年の問題行動と家庭
◎参加人数 一八五名
◎テレビ放映 内容
◎生に際する相談
◎学習に関する相談(考査がわりに答える)
◎親に対する不満の相談
◎カンパに関する相談
◎死に関する相談
◎電線を開ける人の相談

第18号1988. 3. 10発行

広報紙で紐解く緑中の歴史

100号記念特別企画

本紙「みどり」は今回で記念すべき100号となりました。広報委員会が代々引き継いできた広報紙の制作活動。100冊の広報紙を読み返すと、この活動の意味がわかったような気がします。

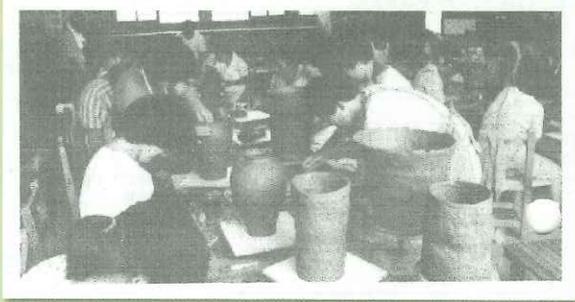
この特集では緑中学校の歴史の一幕を、広報紙を通して紐解いていきます。12ページの編集後記と共に、ご覧ください。

PTA陶芸教室

毎年7月に開催されていた陶芸教室。毎回大好評で、朝から弁当持参で作業に没頭していたようです。

作品は先生によって焼き上げられ、完成品は学校祭で展示されました。写真には花器などを作る様子が写っています。大きいので焼くのも大変だったそうです。

第4号1984. 8. 30発行



第6号1985. 2. 28発行



今年も三年生の卒業記念に、PTA・同窓会からみどり焼きの湯のみ茶わんが贈られる。生徒が中学校生活の思い出に残る一言を考

緑中OBの芳賀PTA会長のみどり焼です。久しぶりに手に触れ「当時の自分と再会したようで、なんだか照れますね」と話していました。

この文字は春木先生が書いたものです。



卒業記念品は『みどり焼』

昔の卒業記念品はみどり焼の湯呑みでした。湯呑みに書かれている文字は生徒が自ら考え、写真には春木幸雄先生にその文字を書いてもらっている様子が写っています。春木先生は体育の先生でしたが、賞状書士もしていた達筆な腕を活かし、みどり焼の制作に尽力されていたようです。

みどり焼を卒業記念品として贈呈する活動は2006(平成18)年まで続けました。

みどり焼の由来

緑中開校10年にあたる1957(昭和32)年、当時から鉄北地区は学業に対する教育熱心な地域で、更なる岩見沢の文化的な教育の充実を目指し、北海道学芸大学(現教育大岩見沢校)の山岡三秋先生(こぶ志焼)の監督で、緑中敷地内に焼窯が作られたとされる。

倒炎式といわれる本格的な窯が中学校に設置され、教師が直接指導に当たるということは大変珍しく、各地から注目を浴びた。道内教育機関の陶芸指導では先駆的な存在であった。

初代の指導者は吉田千代太氏で「窯を作って生徒に何か作らせたい」と言ったことが窯を作るそもそものきっかけになったといわれている。陶器部の顧問としても精力的に活動し、部員には道展で入賞する者もいて、当時の作品は現在も校内の相談室(茶の湯の部屋)に展示されている。

みどり焼に尽力された歴代指導者は、吉田氏の他に鈴木敦夫氏、塚本貞夫氏、田中敏夫氏、川村昌保氏、春木幸雄氏、笹木成一氏他。

校舎改築と共に焼窯は取り壊され、その後にはK組に設置された電気窯を使用した。

みどり焼

緑中OBや元職員にお声かけをして送っていただいたみどり焼の写真です。

食器棚の奥で持ち主の成長をじっと見守ってきたのではないのでしょうか。

同じものは2つと無いOnly oneの卒業記念品です。

↑送って頂いた写真の中で一番古いみどり焼。60年ほど前のものだそうです。

第38号1993. 3. 12発行

みどり焼 (卒業記念品)



湯のみに生徒のこぼを書き笹木先生

忙しい授業の合間を縫って、休み時間に校長室を簡借して言葉を書く作業している笹木先生。第38号の表紙を飾りました。



「書く作業は塗料が漆むから結構大変なんだよ」と当時のことを懐かしそうに話していた笹木先生。退職後も含め計24年もの長い間みどり焼に尽力され「教壇なら5,000個くらい作ったんでないかな」と話していました。過去にはある卒業生から「みどり焼を割ってしまったのでもう一度作ってほしい」と依頼を受け、作ったこともあったそうです。

7月に芳賀会長と広報委員2人で栗沢のご自宅兼翠窯へ取材にお伺いしました。笹木先生は芳賀会長の中学生時代の担任であり、当時在籍していたバドミントン部の顧問でもありました。当時のことを振り返り、思い出話に花を咲かせていました。

燃料は石炭で一度窯に火をつけると30時間はかかりきりで、15分と窯を離れることはできない大変な作業だった。

窯は2・5メートル四方くらいの人間も入れる程の本格的なもので、工房は大変古くて冬は寒かった。当初、窯や建物は教育委員会の所有物だったが、後に緑中に寄贈された。

卒業記念品の湯呑みは、昭和末期から平成初期にかけて、教材で仕入れた素焼きの湯呑みに生徒の好きな言葉を書き入れ、色付けて本焼作業をするスタイルだったが、昔は教師が200個以上もある湯呑みを一から制作して素焼きもしていた。

燃料は後に灯油へと変わった。一度に使う灯油は300リットル。窯が取り壊され、K組にある電気釜を利用するようにになると、スイッチひとつで焼き上げることができるようになった。

卒業記念品のみどり焼は、退職後も自宅の翠窯で制作を請け負い、退職から10年後の平成18年まで続いた。

(談・笹木成一先生)



文字の記入を終え、焼かれるのを待つ湯呑み。日付は2月13日とあります。卒業式間近ですね。

*1 更に時代を遡ると、器も生徒自身で作ったり、生徒が文字を書き入っていた時代もあった。

みどり焼について

当時の先生に聞いてみました



笹木成一先生

1982(昭和57)～1996(平成8)年度まで14年間美術教諭として緑中に在籍。栗沢町工芸協会会員。北海道学芸大学(現教育大岩見沢校)で山岡三秋先生(こぶ志焼)の指導を受ける。1994(平成6)年、栗沢の自宅に翠窯(みどりがま)を構える。道展他多数入選。83歳。